

永井株式会社

昭和5年から目薬の容器を製造
キャップや中栓にも技術を結集



取締役社長 永井 孝明さん

明治45年に、田中弥ガラス製造所として創業し、化粧瓶や薬瓶、輸出用瓶などを製造していました。「田中弥」は創業者の名前。2代目から永井姓で、私で4代目になります。

昭和5年から製造が始まった「滴下式両口点眼瓶」は、製造スピードも今よりはるかに遅かったので、長期間作りだめをして在庫を積み上げ、発売前に一気に出荷するということだったそうです。

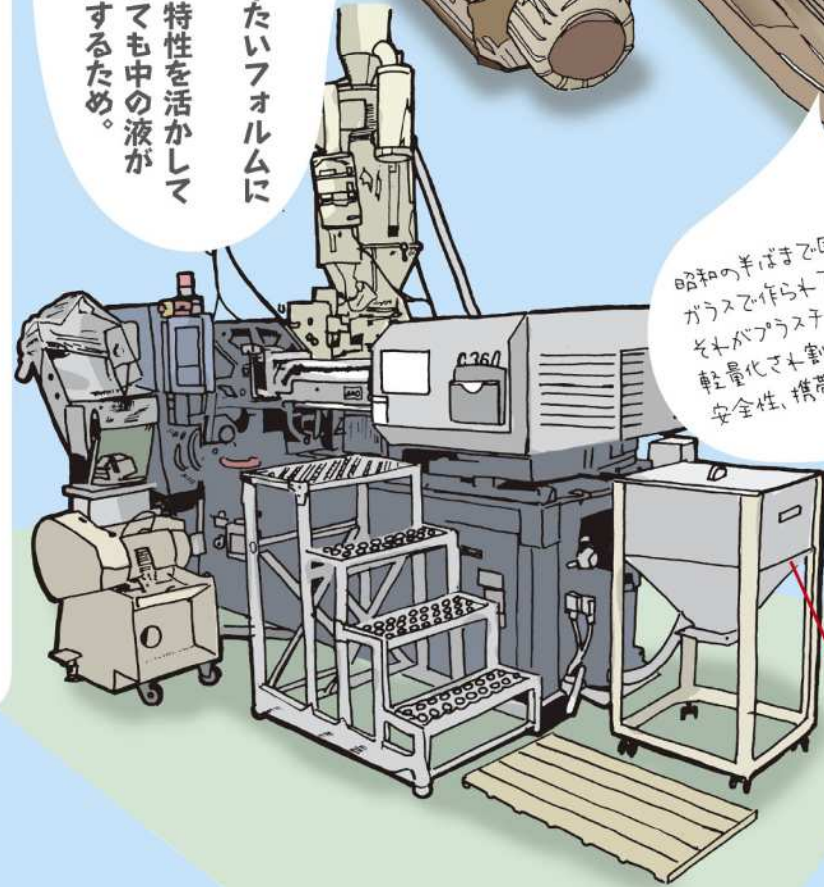
昭和30年代末には、ガラス瓶の歴史を土台にプラスチックの透明瓶製造へと業態を転換しました。素材、製法をきちんと選ばないと、すっきりきれいな瓶は作れません。透明素材への技術力を評価され、目薬以外に化粧品やそのほかの薬瓶なども製造。容器ひとつとっても、使い手のエンドユーザーから改良点やクレームが届きます。その都度、その意見を大切にしながら改良したことが品質向上につながっています。

縦長の形から平たいフォルムに変わったのは、プラスチックの特性を活かしてやわらかく押ししても中の液が出やすいようにするため。

昔はガラス製で、今はプラスチック製です。



昭和の半ばまで目薬容器はガラスで作っていた。それがプラスチック製に変わったことで、軽量化と割れにくくなったので、安全性、携帯性も高くなった。



お客様の依頼があれば、その容器を設計から実現します。



どんなデザインでもお客様の

高機能プラスチックで 目薬の容器製造を行う

明治時代に今のような目薬が誕生。最初は薬剤をガラスの瓶に入れ、スポイトのような点眼器で目に液を落とすというものだった。その後昭和6年、大手製薬会社から携帯性を高めようと、「滴下式両口点眼瓶」という瓶と点眼器が一体になった目薬が発売された。その容器を製造したのが同社だ。

滴下式両口点眼瓶とは、上部の孔(あな)にゴムキャップをはめ、そのゴムを押すと下の孔から目薬がさせるというもの。画期的な容器での目薬は全国で発売され、いつでもどこでも手軽に目薬がさせるとあり爆発的な人気になった。以後、1967年までガラス製点眼瓶の製造を行ってきた。そのあと容器はプラスチック製に変わり、上部に点眼孔があき、ネジでふたをしめる形へ。さらに、その後、ふたをクリッとひねってあける形へと変遷。さらに現在では、種類ごとに容器の形や色のバリエーションはもちろん、ふたがしまったことが感触と音でわかったり、軽く押すだけで1滴だけ目薬が出るボディなど進化を続けている。

メーカーが目薬の生産を一部ベトナムに移管するのにあわせ、同社もベトナムに生産拠点を展開。目薬など薬を日本で販売するには、容器も厳しい基準をクリアしていなければならない。たとえば、液もれしないなどの機能管理、衛生面などの異物管理など。日本品質そのままの製造法やクオリティにのっとり現地で生産、現地で納品、そして充填されたものが日本で販売されている。クリアで高品質な容器を作り出す技術をもとに、化粧品など容器バリエーションが広がっている。

永井株式会社

<http://www.nagai-co.jp/>
〒544-0014 大阪市生野区巽東3-5-37
TEL 06-6758-7758 FAX 06-6758-7757

事業内容/医薬品、化粧品容器などプラスチック製品の製造・販売

出荷前の最終検品室。
製品に人間が直接触れる
のはこの部屋だけ。

我が社の 自慢 環境問題を考え 地域との調和に取り組んでいます

1200坪のゆったりした敷地に本社や工場が建つ。この場所は、ももとはのどかな田畑が広がる場所。ガラスの溶解のために石炭や重油を使用するが、田畑にすすをまき散らすわけにはいかないので、昭和37年の工場竣工時に、すすの出ない設備を工夫。さらに周辺が宅地へと変わる中、桜をはじめ樹木を配し、芝生を育て、地域との調和を図ったことで大阪市から表彰を受けています。

衛生面が非常に大事。
製造現場に入室する時に使う
粘着テープクリーナーは1回使うと
次の番号の箱に移し、3回使うと
新しいテープ面に変える規則。

現在、
瓶蓋製造工程は
スツキリした爽快感、
刺激が少ないなど使用感が
ボトルを見たら
分かるように工夫されています。

